

学習者オートノミーの実践

—マレーシアの大学におけるブログポートフォリオを用いた日本語学習—

Learner Autonomy in Action:

Malaysian University Students Learning Japanese Language Using Blog Portfolio

Universiti Sains Malaysia 芝原里佳

要旨：

社会の変化に伴い日本語学習者の背景は多様化している。それに応えるために学習者中心の日本語教育へと転換することが必要であり、その実現には学習者オートノミーの実践が不可欠である。本稿では、マレーシアの大学で行った学習者オートノミーの実践について紹介する。この実践の特徴はブログをポートフォリオとして用いていることである。実践によって学習者オートノミーがどのように育成されたかをデータを基に考察する。

学習者オートノミー ブログポートフォリオ 学習目標 リソース 自己評価

1. はじめに

近年、日本語学習者のレディネスや目的、ニーズ、学習環境はますます多様化していると言われている。情報技術の発達により、学習者はドラマやアニメ、Jポップなどの情報をリアルタイムで手に入れることはもちろん、ソーシャル・ネットワーキング・システム（SNS）やEメール、スカイプなどを使って目標言語でその話者とコミュニケーションをとることが難しくなくなった（トムソン 2011）。教室外で日本人と日本語に接する場面が多様化したことが、学習者の背景の多様化に結びついていると言えるだろう。日本語に関する多様な背景を持った学習者たちが、日本語クラスに集まってくるわけだが、日本語クラスでは何が行われているだろうか。たいていの教育機関の外国語コースでは、学習目標、シラバス、カリキュラム、教科書などが定められており、教師はそれらに沿って教育活動を行うことが求められている。学習者たちは決められた教科書を読み、教師が提示する日本や日本語に関する情報を聞き、教師の行う教室活動に参加するだろう。しかし、そこでの日本や日本語に関する情報や教室活動が、特定の関心やニーズを持った学習者たちを完全に満足させることは不可能だろう。多様化した日本語学習者の背景を考えると、教える側中心の教育活動から、学習者中心の教育活動へのシフトが必要なのは言うまでもない。学習者中心の教育活動へとシフトすることは、明確なニーズや学習目標を持っていない学習者にも、自らの学びに自覚的になる機会を与えるはずである。学習者中心の教育活動では、学習者自身が学習目標を定め、目標を達成するために何をすればいいのかを考え、それを実行すること、いわゆる学習者オートノミーが重要になる。この学習者オートノミーという概念は、生涯に亘って言語を学習することを提唱するヨーロッパの言語教育政策

における重要な概念でもある (Little 2009)。本稿では、学習者オートノミーを育成する実践として行った活動について報告する。その実践の特徴は、学習者がブログをポートフォリオとして使用していることである。まず始めに活動の理論的背景にある学習者オートノミーの概念とその学習構造について簡単にまとめる。次に活動の内容について報告し、この活動によって、どのように学習者オートノミーが育成されたかを、学習者のブログやティーチングログ、アンケート結果などの資料をもとに考察する。

2. 学習者オートノミーとそれを支える学習構造

学習者オートノミーの父と呼ばれる Henri Holec は、学習者オートノミーを「自己の学習を管理する能力」と定義し (Holec 1981)、それ以来その概念は欧州評議会 (Council of Europe) が言語教育・言語学習について考える上で要となる概念であった。なぜなら欧州評議会は、第二次世界大戦の反省から、責任を持って社会問題に取り組み、生活環境を変えていける市民を育てることを教育の目的の一つとして掲げており、学習者オートノミーはその目的のために必要不可欠な能力だと認識していたからである (青木&中田 2011)。Holec (1981)は学習設定から評価に至るまで学習のあらゆる側面について責任を持つことを学習者に求めており、それを可能にするには、学習者が自身の学習のコントロールを可能にする構造の中で勉強しなければならないと述べている。Murray (2009) は、学習者オートノミーを奨励するための学習構造を次のように練り上げ、実際に国際教養大学のセルフ・アクセスセンターの学習環境やプログラムの理論的枠組みとしている。その構造とは、第一に学習者が自分の学習を計画することである。つまり自らのニーズと関心に基づき学習目標を設定し、リソースを選択し、適切な学習活動を選び、評価方法を定めるのである。第二に、学習者はリソースを使って積極的に言語使用に取り組む。第三に、教師は学習方法について学習者に対しアドバイスやサポートを行う。第四に、学習者は自分の学習について定期的に内省する。第五に、学習者は自分の学習を振り返り自己評価できるように、学習過程の記録や成果をポートフォリオに蓄積する。最後に、目標設定から評価に至るまでの決定において学習者の個人差を考慮し、学習の個人化を促すことである。筆者が本稿で報告する活動は、Murray の学習構造の定義を参考にしている。そして学習者が学習過程を記録し成果を蓄積するポートフォリオとして、ブログを利用することにした。

3. 実践

3-1. 実践の背景

筆者が教えるマレーシアの大学には選択日本語コースと副専攻日本語コースがあり、前者は4レベル、後者は5レベルある。筆者が本活動を行ったのは選択日本語コースのレベル3のクラスであった。活動を実施したクラスの概要は以下の通りである。

表1 活動実施クラスの概要

コース名	日本語レベル3
レベル	初級後半～中級前半
教科書	みんなの日本語 第17課～第24課

コース全体の 評価方法	60%・・・期末試験 40%・・・コースワーク ①聴解試験 (10%) ②口頭試験 (10%) ③ポスター発表 (10%) ④本ブログ活動 (10%)
授業時間	2時間×2回×15週
実践期間	2010年12月～2011年4月 (1学期を通して)
学習者数	15人

3-2. 実践の目的・手順・評価方法

学習者にはこの活動の目的を、日本語を使って自分ができるようになりたいことが可能になるよう責任を持って学習計画を立て実行することができる、自律した学習者になることであると伝えた。そのためには具体的に、①自分の学習目標を設定すること、②その目標を達成するために、どのような学習活動やリソースが必要かを考えて計画を立てること、③自律した学習者と言っても、一人だけで勉強する学習者という意味ではなく、教師やクラスメートと相談することも大切であると話した。なぜなら日本語学習に関する教師やクラスメートとのやりとりは、広い意味で日本語学習のリソースだからで、積極的に教師やクラスメートと関わって、自分の日本語学習に役立てるようにと説明した。

学習目標を達成するための学習活動を行う場、あるいはその成果を保存し提示する場として、ブログを採用した。ブログとはインターネット上に掲載することができる個人の日記のようなもので、ポストと呼ばれる投稿記事を書いてアップロードすると、それが時系列順に表示される。したがって学習者は、日本語で書いたものを過去にさかのぼって全て閲覧ことができ、自分の学習過程や日本語の上達を振り返るのに便利である。またポストとコメント欄を通じて学習者は読者とコメントのやりとりができるので、教師やクラスメート、その他の読者との交流が可能になり、その交流を通じて日本語を学ぶことができる。深井(2010)はブログのこのような特徴を利用し、ブログを日本語学習のためのポートフォリオとして用いること、また他者からのフィードバックというアセスメントが行われる場として活用することを提案している。

学習者が活動を行うにあたり、筆者は次のようなスケジュールを設定した。

表2 活動の進行スケジュール

第1週目	活動の目的について説明する。学習者は教師と個人面談し、①学習目標、②学習活動、③使用するリソース、④評価項目について話し合い決める。
第2週目	授業時間を使いコンピューターラボで各自ブログを開設する。最初のポストで自己紹介と自分の学習目標について書く。
第5週目	2回目のポストをこの週までに書いて投稿する。
第8週目	3回目のポストをこの週までに書いて投稿する。
第11週目	4回目のポストをこの週までに書いて投稿する。
第14週目	5回目のポストをこの週までに書いて投稿する。
第15週目	自己評価を行う。

第一週目の筆者との面談で、学習者は学習目標と活動内容について話し合った。下はそれぞれの学習者の学習目標である。ブログを実際に書く活動は授業時間外に行われた。

表3 学習者の学習目標

学習者	学習目標
C	(漢字が弱いので) 漢字を使って文章を書けるようになる
G	自分が作った日本の料理を紹介する
A	日本語能力試験N4レベルの文法を習得する
J	人との「関係」についてエッセーを書く
Y	好きな歌の歌詞やおもしろいイベントについて紹介する
P	旅行で訪れた場所について書く
K	見た日本のドラマについてあらすじとコメントを書く
S	仏教の教えを日本語に訳し、自分の考えを書く
W	最近読んでおもしろいと思った本の感想を書いて紹介する
I	めずらしい日本の食べ物を紹介する
B	日々のできごとや考えたことを書く
Z	日々のできごとや考えたことを書く
D	日々のできごとや考えたことを書く
F	日々のできごとや考えたことを書く
H	日々のできごとや考えたことを書く

活動の評価は、学期末に学習者本人と教師の二者によって行われた。自己評価をすることによって、学習者に自分の長所や短所を認識させ、自分の学習を定期的に振り返り、必要があれば学習方法の改善を図る対策をとる（佐藤&熊谷 2010）といった効果を期待した。さらに学習者による自己評価は、言語学習を社会文化的な活動であると捉える考えから派生するものでもある。言語学習を社会文化的な活動として捉えるということは、言語学習とは言語を用いて他者と相互に影響を与え合いながら知識を作り上げていく過程であると捉えることである（石黒 2004, 西口 2004, Lave & Wenger 1991）。そのような社会文化的アプローチの観点からすると、学習者の言語能力の評価は、学習者自身も含めて、学習者との言語活動に関わった者によって、その言語活動の過程や成果に対して行われることが適切であるということになる（深井 2010）。学期末の自己評価の際、学習者は学期始めに教師と相談して決めたいいくつかの評価項目に基づいて10点満点中の点数を書き、その点数を自分に与える理由も書いた。学習者による自己得点はコースワークとしてのこの活動（成績全体10%）の半分（5%）とした。

3-3. 教師の役割

この実践において教師は、活動の意義を学習者に説明し、活動の枠組みを設定し、学習上のアドバイスと評価を行った。アドバイスとして行ったことの一つは、学習者が書いたポストには必ずコメントを書くことであった。コメントは内容に関することと日本語に関することの両方を必要に応じて書いた。ブログにポストをアップロードする前に、教師と

面談をして日本語の文を修正したいと申し出る学習者が数人いたので、それらの学習者とは週に一回程度の割合で面談をし、より意味が通じる文になるよう話し合った。ほとんどの学習者は適切な日本語を書きたいと望んでいたが、その方法に行き詰まっていたので、適切な日本語の文を書くためのリソースや使用方法について、個人面談やクラス全体の場で教えた。例えば、自分の書いた表現がどれほど一般的に日本で使用されているかを確かめるには、Google で検索してヒット件数を見てみるという方法がある。ヒット件数が多いほど一般的に使われているということになる。さらに適切な表現を知りたいときにも、Google 検索が利用できる。例えば「友達の家」と「泊まった」の間に入る助詞がわからないとき、Google の検索欄に、“友達の家 * 泊まった”と書いて検索すると、*の部分にあらゆることばが入った文がずらりと表示される。そこで「友達の家」と「泊まった」の間の助詞には「に」が使われることがわかる。また翻訳サイトを利用する際の注意事項も提示した。例えば、原文が長くなればなるほど訳文の精密度は落ちるので、できるだけ短い単位で翻訳し、全体の構成は自力でやるほうが安全であることや、日本語では「私」「あなた」などの代名詞はあまり使わないので、訳文にそれらが含まれていれば、それらの言葉についての助詞と一緒に削除したほうが自然な文になることなどを示した。従来、翻訳サイトの利用は、学習者がそれに頼りすぎて自力で文章を書かなくなることを心配し、多くの教師はそのようなサイトを学習者に使わせないようにしてきたかもしれない。そこには、学習者が「考えなくなってしまう」ということへの恐れもあるだろうが、根底には、日本語能力とは学習者の頭の中にある知識、あるいはその知識を使ってできることであるという従来の日本語能力観があるかもしれない。しかし、実際私たちが日常生活で外国語を使うとき、それらのリソースを総動員して書いたり読んだり話したりしていないだろうか。周りにあるリソースを上手に使いこなすことによって、さらに高度な日本語を読み・書き・話し・聞けることもまた、その学習者の日本語能力であると捉えるべきである。リソースを使いこなす力は、学習者オートノミーの育成には欠かせない。リソースの在りかや適切な使用方法を教えることは教師の重要な役割なのである。

4. 活動の分析と考察

この節では、以下の資料を分析し、このブログ活動によってどのように学習者オートノミーが育成されたかを検証する。

- ① 各学習者とのやりとりを通して筆者が気付いたことなどを書き留めたメモ
- ② 学習者のブログ
- ③ 学習者の自己評価表
- ④ 活動終了後に行った学習者へのアンケート結果

4-1. 学習者の活動と自己評価

4-1-1. 事例1：学習者J

学習者Jはこの活動以前から母語でブログを書き、日本語の練習のために、たまに日本語で書くこともあったと言う。教師との面談でJは、家族、恋人、友達といった自分に近い人々との関係についてエッセー形式で書くことを学習目標に設定した。Jは第一

回目のポストで、「恋人の関係」と題して次のような文章を書いた。

Thursday, January 20, 2011

関係のポスト、一：恋人の関係

愛はみんなの生活に、このことは追求しなければなりません。私は高校生のとき、夢はたくさんがありました、ハンサムな男の人が欲しいでした、幸せの関係が欲しいでした。でも今私は愛の見解にその存念があります。この歌は中国の歌手からとても有名な曲です。曲の名前は**それは簡単ではない**です。

(中国の歌手の歌「それは簡単ではない」のJによる日本語訳)

この歌詞の意味は私は愛の気持ちを類似ですから夢の時代後、平和の関係が欲しいです。じゃみんな、これは私の意見です。みんなは？

このポストを読んで筆者は、『それは簡単ではない』の歌詞をがんばってよく日本語に訳したことを褒めた後、なぜJ自身が本当の愛を見つけることを「簡単ではない」と思うのか、なぜこの歌に共感するのか質問した。そして、自分の経験やそこで感じたこと、思ったことを書けば、読む人はJがそのように考える理由をもう少しよく理解できるのではないかとアドバイスした。このコメントについてJから直接の反応はなかった。しかし、次の「友達の関係」がテーマのポストでは、大学入学以降の生活の変化が友人関係の変化をもたらしたという因果関係をJは示し、Jの現在の思いが読者にとって理解しやすくなっている。

Tuesday, February 8, 2011

関係のポスト、二：友達の関係

これは私の日本語第二回のポストです。私のポストのトピグは関係です。・・・(略)小学校と中学校の時に多くの友達がありました。その時みんなは互いに非常によく毎日笑いです、毎日もう幸せです。その大学の生活に、友情を見つけることはとても難しいです。大学生の意味は、忙しい世界に入りました、学術、友情、家族、自分や、どちらも注意しなければなりません、これは絶対非常に難しいことです。私は自分を体験しました。今私はもう経験した、だから、大学生のささやきは、私は了解です。(筆者下線)もし私たちがうちでいます、すべての時間私たちは家族に失礼なことをしました、もう大丈夫です。永遠に許される。でも、大学に、一緒にあることの人は家族じゃありません、それは友達です。自分の気性を忍耐することができるの友達が良い、相互理解の友達が良い、心の中の秘密を話したいの友達が良い、それ全部は易しいじゃないの事です。・・・(略)友情は恋人に同じように、互いの理解が必要、互いの忍耐が必要、互いの護持が必要。・・・(略)もしあなたたち親友をまだ見ません、あきらめてはいけない、世界の一つの一角であなたに了解の人があります。もしあなたたち親友を見ました、じゃ、お互いを大切にする必要がなければなりませんね！

Jはこのポストで、「大学生活に、友情を見つけることはとても難しい」と述べ、その理由を「忙しい世界に入りました、学術、友情、家族、自分や、どちらも注意しなければなりません」ということばで表現している。つまり勉強も含めていろいろなことに忙しく、なかなか友情を深める時間を自分も周りの友達も持ちにくいということのようである。し

かしそれでも「自分の気性を忍耐ことができる」「相互理解の」「心の中の秘密を話したい」友達が欲しいという本心を語っている。Jはこのポストを書いたことによって二人のクラスメイトと友人である日本人学生から共感するコメントを受け取った。筆者はコメントとして次のように書いた。

友達との関係のこと、Jさんの考えがよくわかりました！親友を作ることが難しい原因のひとつは、忙しい生活だというJさんの意見、よくわかります。自分も他の人も忙しいから、じっくりと話をする時間があまりないですね。話をしないと、なかなか友達になることができませんよね。・・・(略) (February 17, 2011)

そして、ポストの中でJが使っている表現について次のように質問した。

「私は自分を体験しました。今私はもう経験した、だから、大学生のささやきは、私は了解です。」この部分が少しわかりにくいのですが、どういうことですか？特に「大学生のささやき」って何ですか？

これに対してJは次のように説明した。

先生、大学で、いろいろなことを体験する、だから、本当の友達の探ることは難しいです。それは大学に三年いますのささやきですよ。(February 18, 2011)

この説明を読んだ筆者は、『『三年間の大学生活でいろいろなことを経験したので、本当の友達を探るのは難しいということが自然とわかりました』という意味ですね。』とコメントした。このように筆者とのコメントのやりとりを通して、もとの文では意図が伝わらないことをJは知り、相手に伝わるよう日本語の表現を変える努力をした。このように他者との意味交渉の経験を経て、Jは日本語で表現する力を向上させたと言える。

学期初めにJが設定したブログの評価項目は、①内容がおもしろいこと、②正しい文法が使えていること、③たくさんコメントをもらうこと、だった。学期末の自己評価でJは自分自身に10点満点中7.5点を付けた。点数の理由の欄では、減点する理由としてJは、もらえたコメントの数が期待していたより多くなかったこと、文構造の正しさには不満があることを挙げた。活動をして良かったこと／学んだことについては、以前よりスムーズに日本語を書けるようになった、日本語を練習する場所や方法を見つけられた、友達や先生と日本語でやりとりができ、みんなについていろいろ知ることができたと書いた。このことから、Jは、他者を意識して自分の考えを書き、他者との意見交換や意味交渉を通して、相手と自分の関係性を築いていくことができたことを認識していることがわかる。そしてそのやりとりの場こそが「日本語を練習する場」であり、「自分の日本語を磨く方法」であるとJは認識していることがわかる。

4-1-2. 事例2：学習者Y

学習者Yは普段から英語でブログを書いており特定の友人を読者として持っていた。教師との面談では、好きな歌の歌詞を日本語に訳してコメントを書いたり、楽しいイベントがあればそれについてみんなに紹介することをこのブログ活動の目標としたいと述べた。Yはブログが読者とのコミュニケーションの場であることをよく認識しており、自分のブログにポストを書くだけでなく、多くのクラスメイトのブログを読んで積極的にコメント

のやり取りをした。次のポストはYが日本のカレーを作ったことについて写真と一緒に投稿したものであり、複数のクラスメートからコメントを受けたものである。

Tuesday, February 15, 2011

カレー

この間、日本のカレーライスつくった^^とてもいい香り(かおり)した、おいしかった~。つくり方は簡単(かんたん)だ、誰(だれ)でも作れるんだよ! 先ず(まず)は材料(ざいりょう)の用意(ようい)だよ。最も(もつとも)基本(きほん)と簡単のカレーの材料はじゃがいも、にんじん、玉ねぎ、鶏肉。私は鶏肉をいい香りにしたかったから、大蒜(にんにく)を用意した。・・・(略)ほかの材料も自分が食べできるの量で用意してね。写真のように、すべての材料を一口に切って。肉もね! ・・・(略)

~作り方~

1. 熱した(ねっした)の鍋(なべ)に油(あぶら)をいれって、ニンニクをいれって、金色までに炒め(いため)て。
2. 鶏肉をいれって、中火で表面(ひょうめん)に焼き(やき)色がつくまで焼い(やい)て。肉は半熟(はんじゅく)にしての方がいいと思う、そうしないと、できたの時肉が硬く(かたく)に成るんかもしれない。・・・(略)

このブログが投稿された後、クラスでYに会った時に筆者は「上手にカレーの作り方が説明できたね」と伝えた。するとYは日本語の料理のウェブサイトを読み、それを参考にして書いたと教えてくれた。Yは日本の料理のウェブサイトのリソースとして利用することを思いつき、自分の目的を達成するのに役立てたと言える。次の、クラスメートGとのやりとりからは、クラスメートからの情報もYにとって日本語学習のリソースとなっていることがわかる。

Y: (Gのブログへのコメント) どうやって漢字の上にひらがなを書くの? 教えてください~ (March 30, 2011)

G: 先ずMS WORDに書いて、漢字をハイライトして、PHONETIC GUIDEのボタンを押したと、上にひらがなが表示されますよ。ポストを書いたら、MS WORDからコピーをします。(April 1, 2011)

Yは上のポストでも見られるように、読者(主にクラスメート)が読めないかもしれない漢字の後ろには読み方を()に入れて提示していた。しかしGがブログで漢字にルビを振っているのを見て、そのやり方を尋ねたのだ。このように、学習者は教師からだけでなく学習者どうしで日本語学習の方法について学びあっていた。

学期初めにYが設定したブログの評価項目は、①ポストの内容、②コメントの数、③もらったコメントへのフィードバックの内容、であった。それらに基づいてYが自己評価で自分のブログに与えた点数は10点満点中9点であった。点数の理由としてYは、文法で間違えたところはあるかもしれないが、いっぱい資料を集めてすごくがんばって書いたのでいい点数を自分にあげたい、と書いた。この活動をして良かったこと/学んだことは、たくさんの日本語の表現を学ぶことができ、実際の生活上のコミュニケーションに日本語を使うことができたということであった。自己評価の後、Yは次のようなポストを書いた。

自己評価について、そして今回のブログ活動についてYの率直な意見が書かれていると思うので紹介したい。

Tuesday, March 29, 2011

点数？

今日、先生がフォームを出しました。自分が自分のブログに点数（てんすう）をあげてて言ってた。これは私たち学生にとって、ちょっと難しいです。何故なら、何点にあげるなら好いかなと長い時間考え（かんがえ）ました。私、自分に高い点数あげました。帰り道に、高すぎかなと思った。何かはじが知らないと思う、でも後悔していない、自分はブログを書くとき本当に頑張ったから。ブログをかぐ前にいつも資料をいっぱい集めて（あつめて）、日本語に訳して、書いた後文法とか助詞とかチェックして。特に英語の歌詞の訳は難しいかった。一つ日本語の授業のポストをかぐね、たいてい一日かかる、あるとき二日もかかる。すごく頑張って書いたけど、日本語があまり上手じゃないから、文法と助詞が間違えたこともあるかも。私は私のベストを尽く（つく）した、一生懸命（大げさかな）ポストを書きました、無念がない〜！このブログで、いっぱいのことを学びました、そうしてブログを書くのは楽しいことです。皆もこのブログのために頑張ったと思う。私より苦労したの人もあるかも、先生も大変と思う。皆、お疲れ様でした。

これに対し、三人の学習者B、J、Gが次のようなコメントを書いた。

B：同感！（March 29, 2011）

J：私も！歌詞の訳はととても難しいです。でも無念がない〜！はは！（March 30, 2011）

G：実は私も自分に高い点数をあげた。：Pでも、あなたの日本語が上手だから、心配しなくてもいいよ。（March 30, 2011）

Yのポストを読むと、Yが決して安易な気持ちで自己評価を行っているのではないということがわかる。また自己評価という評価方式が、学習者に自分の学びについて責任を持たせるという効果があることもわかる。そして何より、筆記試験などによってある一時点での知識やパフォーマンスだけが評価の対象とされてきた従来の評価方法に比べ、自分の学習過程やその成果が評価の対象となることについて、満足感や達成感を感じていることがわかる。最後に「ブログを書くのは楽しいことです」とYが書いているように、自分が決めた学習目標を達成する過程において、学習者は楽しさや充実感を感じることができた。楽しさや充実感を感じることが、大変な努力を要することでも成し遂げようとする原動力になるようだ。

4-2. アンケート結果

活動終了後この活動に関するアンケート調査を行った。質問は①この活動で何を学びましたか、良かったことは何ですか、②活動中どんな問題がありましたか、③この活動をもっとよくするための提案は何ですか、の三つである。

この活動で学んだこととして多く学習者が挙げたのは、非常にたくさんの日本語のことで（12人）、自分の考えを表すためにそれらを使って文章を書くことによって日本語の力が向上した（5人）ということであった。また学習者オートノミーの育成というこの活動の趣旨を反映したコメントとして、人との「関係」について書いたJは、このブログ

活動が “a channel to practice Japanese” であったと書いた。ブログという教室以外にも日本語を使える場と手段を得たことは、J が望むときにいつでも日本語を学習するのを容易にするだろう。ドラマの紹介を書いたKは “I could learn Japanese faster because it was autonomous learning” と表現した。日本の食べ物を紹介したIは「自分で文化を習いました」と答えた。日々の出来事や気持ちを綴ったBと、本の紹介をしたWは、日本語でブログを書くことが自分の趣味になったと書いた。またクラスメートのブログを読んだりコメントをやりとりすることによって、クラスでしか会わない友達についてさらによく知ることができ仲間意識が強まったというコメントもあった(4人)。青木&中田(2011)は、学習者オートノミーの理論家の多くがこのような学習者同士のコミュニティ、学習者と教師/アドバイザー/カウンセラーのコミュニティ、学習者と彼らが教室外で接する人々のコミュニティといったものが、学習者オートノミーの実践に影響を与えることに注目していると述べている。この実践でも、教師やクラスメートとのインターアクションによって、学習者たちはコミュニティとしての仲間意識を育て、その意識がさらにブログでのやりとりを積極的にさせる効果があることが明らかになった。

一方、活動中の問題として多くの学習者が、文法の知識が十分でないため言いたいことを文章にするのが難しかった、適切な表現がどれか迷った、といったコメントを書いた(10人)。これらの学習者の何人かは、活動をもっと良くするための提案として、教師(筆者)が文章の間違いを直すことを求めた。しかし、学習者が文章をポストすれば自動的に教師が文法上の誤りを訂正するという方法は、学習者の文章にこめた意図が軽視されてしまう恐れがある。また、学習者は日本語を「教わる者」で教師は「教える者」という権力の構図を蘇らせることになり、学習者が自らの学びに受身な存在になってしまう恐れもある。学習者オートノミーを育成するという観点からすると、適切な文章を書くにはどうしたらいいかを学習者は自ら考え、必要手段として教師からアドバイスを得るという行動を自ら選び取るべきだろう。そのとき教師は表現したいことにより近づけるように学習者本人と忍耐強い意味交渉をするべきだろう。またそのような用意が教師側にあることを、学習者側に周知させる必要がある。

5. まとめと課題

本研究では、既存のカリキュラムや決まった授業時間がある、高等教育機関の日本語教育という環境の中で、学習者オートノミーを育てる実践の可能性を提示した。本活動で学習者たちはそれぞれのニーズや関心に沿って目標をたて、リソースを活用して学習し、自己評価を行った。この活動は学習者オートノミーの育成を目的としていたと同時に、学習者オートノミーの実践の場であった。ブログポートフォリオは、学習過程と成果を記録・蓄積するのに便利である上に、学習者とクラスメート、友人、教師を包括するコミュニティ形成に役立ち、それが学習者オートノミーを促進する効果をあげた。一方、今回の活動では、学習者に自分の学習活動について内省を促す機会をあまり持てなかったため、問題があっても解決できなかつたり、もっと効果的な学習活動を探りやってみることに気付かなかつた学習者も多かった。今後は学期中に一、二度学習者と個人面談の機会を持ち、学

習者がどのような問題を持っているか明らかにし、解決方法を探り、もっと効果的な学習方法は何かを学習者が考え、教師は専門的で具体的なアドバイスを行う機会を持ちたい。教師はそのために、学習者が個々の学習場面で直面する問題や、必要とするリソース、その具体的な使用方法について情報収集と研究をするべきだろう。

本活動は主に授業時間外の時間を使って行われたが、日々の授業においても学習者オートノミーを実践することは可能だと筆者は考えている。学習目標、学習活動、リソース、評価といった分野で、これまで教師が完全にコントロールしていたものを、少しずつ学習者がコントロールするものへと移行してみるのはどうだろう。例えば漢字学習において、教科書を使って一斉授業しているならば、教材をインターネットなどを使って学習者が自由に選べるようにするのはどうだろう。学習過程を記録させたり漢字を使って書いたものなどを成果として提示させると良い。発表やパフォーマンスをさせるなら、評価項目を学習者たちで考えさせ、学習者同士の相互評価や自己評価を取り入れるのも良いだろう。教師の創意工夫で学習者オートノミーの育成の可能性は広がると考えている。

引用文献

- 石黒広昭 (2004) 「学習活動の理解と変革に向けてー学習概念の社会文化的拡張ー」 石黒広昭編著『社会文化的アプローチの実際ー学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』 2-32
- 青木直子・中田賀之 (2011) 「学習者オートノミーー初めての人のためのイントロダクション」ー 『学習者オートノミー』、ひつじ書房 1-22
- 佐藤慎司・熊谷由理 (2010) 「アセスメントの歴史と最近の動向ー社会文化的アプローチの視点を取り入れたアセスメント」 佐藤慎司・熊谷由理編『アセスメントと日本語教育』、くろしお出版 1-17
- トムソン木下千尋 (2011) 「教材からリソースへー学習者が作る日本文化理解ー」 『異文化コミュニケーションのための日本語研究』 第一巻、高等教育出版社 17-18
- 西口光一 (2004) 「留学生のための日本語教育の変革」 石黒広昭編著『社会文化的アプローチの実際ー学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』、96-128
- 深井美由紀 (2010) 「ポートフォリオアセスメントーブログを用いたポートフォリオ」 佐藤慎司・熊谷由理編『アセスメントと日本語教育』、くろしお出版 97-124
- Holec, H. (1981). *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press. レイブ J.・ウエンガー E. 佐伯胖 (訳) (1993). 『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』、産業図書)
- Little, D. (2009). Learner autonomy in action: Adult immigrants learning English in Ireland. In F. Kjisik, P. Voller, N. Aoki & Y. Nakata (Eds), *Mapping the Terrain of Learner Autonomy: Learning Environments, Learning Communities and Identities* (pp. 51-85). Tampere: Tampere University Press and the Authors. (リトル, D. 谷口すみ子 (訳) (2011) 「学習者オートノミーの実践

「アイルランドにおける成人移民の英語学習」『学習者オートノミー』、ひつじ書房 51-89)

Murray, G. (2009). Self-access language learning: Structure, control, and responsibility. In F. Kjisik, P. Voller, N. Aoki & Y. Nakata (Eds), *Mapping the Terrain of Learner Autonomy: Learning Environments, Learning Communities and Identities* (pp. 118-144). Tampere: Tampere University Press and the Authors. (マレー, G. 松下达彦 (訳) (2011). 「セルフアクセス言語学習－構造とコントロールと責任」『学習者オートノミー』、ひつじ書房 123-145)